

“生きる”こと

世界に起こる出来事を、見・聞き・体験したこととして語るとき、当然そこには様々な感じ方が提出されることになります。

しかしそれが例えば、自分の生活や、生きることに直接関わる問題であるときは、その話される内容や言葉は、見た目のパフォーマンスよりもその内容の深さ、つまり信憑性が問われることとなる。

世界の見方は各々であり、日常の中で起こる出来事は、話す相手に興味を持たれる内容に加工修正されながら届けられる。(これはわたし自身行うことでもある)。

しかし、その様々の方の見方の信憑性を問い始めると、話は甚だ難しい問題ばかりにぶつかることになる。

何故なら、その世界の“見方”の根底には、その人の“生き方”が横たわっており、信憑性を問うとは、その人の生き方を問うというところに掛かってくるからであります。

これは、わたしの見方の話しであるのですが、
例えば――、

通常人は、日の光の下でものを見て「そのものを見た」と言います。

しかし、その見たものが一体どういうものであるのかを、自分の感じたことだけを頼りに他の人に伝達しようとする、そこには、見た人の数だけの“見え方”が表されることになる。

しかもその説明の内容をつぶさに検証しようとすればするほど、説明にならないような、形にできないような、曖昧な事実が表出してくることになる。

そうすると、「見る」ことに信憑性を問うこと自体、意味を失うことになる。

そこで人は、辞書や辞典を調べ、あるいはネット検索して、AIの説明を頼り、或いは専門家や先生と呼ばれる人の語る言葉を引き合いに説明を試みたり、或いは、報道や記事、噂等々による引用を利用したりする。

「信憑性」を辞書で引いてみると〔人の言葉などに対する、信用できる度合。信頼性。〕とある。

つまり信憑性とは、受け取る側にとっては、“生きる、”という問題に、直接的に影響を及ぼす度合い。と読むこともきる。

通常、人は、このような状況の中で生活を営んでいるのであるが、しかし、この“信憑性、”を念頭に置くと、その複雑多岐な問題に絡まってしまい、とても通常の生活が送れなくなってしまうだろう。

そのため人は、互いの間に、行き違いや勘違いを感じながらも、日常の中でそれが積み重なって、誤解や偏見へと絡まり合わないよう気を遣いながら生活を送っている。……というのが実情ではないだろうか。

このコミュニケーションの複雑な様相は、人の数が増えるほどさらに複雑さを増しながら目には見えぬが日常のその足元に横たわっています。

人と人が仲良くなるときに、人はこの“複雑なものの見え方、”の中で、共通する“見え方、”を捜し、それを頼りに相手に近づき、コミュニケーションの深化を望む。し、また努力もする。

しかし事はそう思うようにはならない。

何故なら、このときのこの日常の足元に横たわる“見え方＝感じ方、”とは、悪意を受けなくてもさして問題としないような浅い層の部分から、一方には、他からの悪い影響を受けないように守られなければならない……、その人個人の中心に祀られた“生き方、”という神聖な場所が在り、そこに至るまでの切れ目のない繋がりが厳然とそこにあるからだ。

……もしそうでなかったら、
信憑性を問うことなど、意味を成さなくなるであろうから。

コミュニケーションを深めて行く……とは、他でもない、この“生き方、”という神聖な場所へと降りてゆく、あるいは昇って行くことでありましょう。

この“生き方、”とは、その個人が、いままでの全人生の中から学んだ世界観の現れであり、それは自分だけに与えられた「居場所」なのである。

人は、この神聖な場所で生み出す世界観を通して世界を見る。と言っても過言ではないのではないか。

そして人はそこで見た（感じた）ものを通して、様々な出来事を判断し何事かを学んで行く。

このとき人は自分にとって合理的な“考え方”も身につける。

そして、この“考え方”とは、言葉を変えれば“見方の集合体”なのであり、その集合体は、“生き方”という神経組織によって纏められている。……と、そのような姿とも捉えられるのではないかと思う。

少し、話が強引すぎるのではないかと思われる向きもあろうかとも思うのですが、つまり“生きる”という問題を問うとき、この見た目の姿を見てうんぬんすることにはなんの信憑性すら存在しておらず、信憑性を問うのならば、それは、見た目の姿にではなく、その姿を形作っている“生き方”という神経組織の中に働く内容にこそ、その問題の真を問わなければならない。――のだと思う。

それぞれの“考え方”には、その人固有の“見方”があり、この“見方”の内側には、他から犯すことのできない、その個人の中心に祀られた“生き方”から発せられる、世界を認識する“ひかり”のごとき力が浸透していて、人はこの“ひかり”のような認識力でものを視ているのであります。

つまり信憑性はこの部分を問題にするのであり、そこに“ひかり”があるのか？……と、問うているのではないのでしょうか。

通常人は、先にも述べた日の光に照らし出された物を自然界の中に見ています。

そして、照らされる陽の中に温もりを感じる。このことは紛れもない事実であります。

人が、目を閉じてこの日の光を感じるとき、それが冷たい夜の明ける瞬間であれば、誰もがその陽の光を、有り難いものだと感じられることでしょう。

しかし、一旦目を開いたあとは、この日の光に照らし出されたものを見て、人は、それぞれに違うものを観ているのであります。

人はそこに自分にとっての心地よいものとそうでないものを見分けます。

しかし、この心地よいものとそうでないものは、万人共通ではありません。

この快と不快は、その個人の内面によって規定された色合いを持ちます。

そしてこの色合いが、“生き方”に親密であるとき、人はそこに快を得、そうでないと

きに不快を覚えながら、その個人の内面を彩る色彩を創り出してゆく。

つまりこの色彩とは、“生き方”によって表現される、その人自身の“顔”、……のようなものであると考えることができます。

“生きる”という問題が、人間にとっての最重要課題でありながら、人はそのことについて語りたがらない。

できることならこの難題をうまく潜り抜ける道を模索する。

が、しかし、どのような道であっても、痛みや苦しみは襲いかかる。

その問題を放棄することでは何も解決できないだろうと知りながらも、そして一步も、自分の進歩には繋がらないだろうと思いながら、逃れる道を探してもがき苦しむ。

その苦しみが深いほど、問題を放棄することは、自分の大切なものを放棄することに繋がるのだ。と思い至る。

何故、“生きる”という問題が、これほど難しい問題になってしまうのか。

本来“生きる”とは、人にとって最も生き活きと語られるべき内容の出来事ではないのか？

……いや、人は“生きる”ということを誰もが生き活きと語りたいし、語ろうと努力しているのだ。

そしてその努力の先には必ず光明が差すと信じて……。

こうして、人は努力を続けていくある時点で、自分の見方そのものが、そもそも逆転していた事実気付くときがくるだろう。

自分が日の光の下に見ていたものとは、実は自分の力によって見ていたのではない！…と云う事実、気付くときが訪れるに違いない。

それは――太陽が放つ、お日様そのものの姿に他ならない。という事実。

自分が自然界に見ているものは……実は、ものの形や姿に変化して見えている、お日様

の様々な顔に過ぎない。ということに。

自分が目に見ているものとは、そのものの姿ではなくて、そのものに映し出された太陽の“光”の姿でしかなかった。……ということに。

そしてこの時点で、“光”が、自分の内面を照らす“ひかり”としてでは無く、自分の内面の“闇”を照らす光として、認識されるのです。

「・・・自分はそのに、何も見てなんかいなかったのだ。」

自分の“認識の光”はそのものを捉えてはいない…、

自分で視るためには、そのものに近づき、そのものに触れ、嗅いで、舐めて、味わって、そして自分のあらん限りの能力を投じて感じることで、初めて、そのものの何がしかを認識出来るのであり、そのことによって、内的に輝く“ひかり”を得ることになるのだ……と。

自分という内面の力は、この“自分を通して視る”という認識によってもたらされるのであり、自分はこの“ひかり”によって、人間とし“生きる”のだ。——と。

言い方を変えれば、この認識作業が、自己を、“ひかり”のための素材に変えて行く作業である。と言い換えることもできると思う。

つまりそのことを通して、自己という闇の中に、明るさが生み出されて行くのであろう。

この時、自己の内面に創り出した明るさによって、人は、自分を超えた自然の知恵の奥深さと、人間が人間として進んでゆける広大な宇宙の広がりとを……そこに視ることになるのでしょう。

この時、混沌であった世界の姿は、自分の思考を遙かに超えた……未知ではあるが、紛れもない、実質を伴った姿となって現れるでしょう。

日常の中で、混迷して見えなくなっていた世界の繋がりが、そこに見えてくる。

自分に降りかかっていた、不幸な出来事の、その真の意味を識る。

その出来事自体が不幸なのではなくて、関わっている自分がそう視てただけであって、

世界は、自分に不幸をもたらしているのではなくて、その不幸の中に学ぶべき実りの用意されている事実思い至る。

それは、宇宙の中の自分の居場所である自己認識を、高みへといざなう翼ともなるであろうし、世界とは、理解不能な混沌などでは決してなくて、この混沌と見えている一つ一つの出来事を、唯一つの素材と受けとめて、そのことを自己の内面を豊かにする善き機会に変えてゆきましょう。

自分とは、この大宇宙の中に忽然と現れ、意味もなく生きて、また同じように死んでいく――、そのような存在などでは決してなく、“生きる”という、闇に隠れた実質の中に、一つずつ“ひかり”となるものを創りだして、そして、自己の所有する世界を明るくしてゆきましょう。

2013年7月23日

2026年5月29日改訂

隠 太郎（瀬崎正人）